

北海道指定史跡
シブノツナイ 竪穴住居跡
発掘調査概要報告書（2022年度）

史跡内容確認のための調査

湧別町教育委員会

2023.3

例 言

1. 本書は令和4年度に湧別町教育委員会が実施した、北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡の発掘調査概要報告書である。
2. 本書の編集・執筆・写真撮影・図版作成は湧別町教育委員会社会教育課ふるさと館JRY・郷土館の林勇介が担当した。
3. 遺跡位置図、竪穴住居跡分布図など挿図は任意縮尺とし、各図にスケールを配置した。
4. 調査の記録及び出土資料は、湧別町教育委員会で保管する。
5. 土層の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務所監修・日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編1967、33版2010年）による。
6. 基準点測量、トータルステーションシステム・遺跡管理システムなどの測量機材の借用及び測量機材操作指導は株式会社シン技術コンサルに委託した。
7. 珪藻分析はアースサイエンス株式会社に委託した。
8. 放射性炭素年代測定、炭素・窒素安定同位体比測定及び土器胎土中の脂質分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。
9. 炭素・窒素安定同位体比測定は國木田大氏（北海道大学大学院准教授）の協力を得た。
10. 調査及び整理報告にあたり、下記の諸機関及び個人からご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げます（順不同・敬称略）。

文化庁文化財第二課、北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課、湧別町農業協同組合

熊木俊朗、國木田大、岡孝雄、近江俊秀、宗像公司、村本周三、坂本尚史、松田功、合地信生、佐藤和利、今泉和也、太田圭、佐藤実佑

目 次

例言

目次

1. 調査の概要	1
(1) 調査目的	1
(2) 調査要項	1
(3) 調査体制	1
(4) 調査にいたる経緯	1
(5) 過去の調査	2
(6) 調査検討委員会	2
2. 遺跡の位置と環境	2
(1) 湧別町の地理と遺跡	2
(2) シブノツナイ竪穴住居群の立地	4
(3) シブノツナイ竪穴住居群の概要	4
3. 調査の方法と成果	4
(1) 調査区の設定	4
(2) 基本層序	7
(3) 発掘調査成果（概要）	7
4. 普及活動	9
5. 成果と課題	9
(1) 竪穴住居跡の時期特定	9
(2) 古環境調査	10
(3) 今後の調査	10
写真図版	11
引用・参考文献	13
報告書抄録	14

1. 調査の概要

(1) 調査目的

湧別町では、北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡の保護及び活用を進めるため、平成30年度から発掘調査を行っている。調査の目的は、竪穴群の範囲や遺構の年代など遺跡の内容詳細を明らかにすることである。今年度の調査目標は、方形以外の竪穴住居跡について年代を確認することと、竪穴住居群東側に広がる低地の古環境を確認することである。

(2) 調査要項

調査対象	湧別町シブノツナイ竪穴住居群（I-21-35） 北海道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」（昭和42年3月17日指定）
所在地	紋別郡湧別町川西499-1・2, 502-1・2, 503, 714, 717～720, 722-1～3, 930, 1056, 1059-1番地
対象面積	139,462㎡
発掘面積	22.1㎡
発掘期間	令和4年7月14日～8月20日
整理期間	令和4年8月21日～令和5年2月28日

(3) 調査体制

調査主体者	湧別町教育委員会 教育長 阿部 勉
調査事務局	湧別町教育委員会社会教育課ふるさと館 JRY・郷土館 参事（兼館長）中島 一之
調査員	主任 林 勇介
発掘作業員	菊地 俊文、野上 弘幸、山川 修二、吉竹 司

(4) 調査にいたる経緯

北海道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」は平成26～29年度に北海道教育委員会（以下、道教委）が実施する重要遺跡確認調査の対象となり、北海道立埋蔵文化財センターの指定管理者である公益財団法人北海道埋蔵文化財センター（以下、道埋文）により測量と発掘調査が行われた。調査報告書では今後の史跡保存及び調査に求められる課題が示された。

道教委が平成28年度から開催している「北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会」（以下、懇談会）では、道埋文が実施するシブノツナイ竪穴住居跡の調査についても有識者により意見交換が行われてきた。平成28年度第2回懇談会は湧別町を会場として開催され、史跡保全のための意見交換や現地視察が行われた。

重要遺跡確認調査に関する道教委・道埋文・湧別町教育委員会（以下、町教委）の協議や懇談会において、町教委による計画的な調査の必要性が議論されてきた。町教委はその状況を踏まえ、主体的にシブノツナイ竪穴住居跡の保護を進める必要があると判断し、平成30年度から発掘調査を実施している。

(5) 過去の調査

シブノツナイ竪穴住居群は古くとも昭和3年には郷土史研究家にその存在が知られており、昭和4年には発掘調査が行われたと考えられる記録がある。町教委が行った発掘調査は昭和38年が最も古いもので、昭和42年には北海道の史跡に指定されている。現在までの発掘調査履歴は次のとおりである。

調査時期	調査主体	成 果
昭和38年	湧別町教育委員会	竪穴住居跡3基（A, B, C 竪穴）を発掘。擦文土器等が出土。
昭和41年	湧別町教育委員会	竪穴住居跡2基（238, 318号）を発掘。擦文土器等が出土。
平成26～29年	（公財）北海道埋蔵文化財センター	測量図（竪穴分布図）の作成。竪穴群の北側平坦地でトレンチ6か所を発掘。続縄文土器等が出土。
平成30年～	湧別町教育委員会	平成30年は竪穴群の北側平坦地でトレンチ2か所を発掘。続縄文土器等が出土。平成31年は竪穴群の北側平坦地、431号竪穴を対象としてトレンチ各1か所を発掘。令和2～3年は大型の竪穴住居跡4基を対象としてトレンチ各1か所を発掘。擦文土器等が出土。

(6) 調査検討委員会

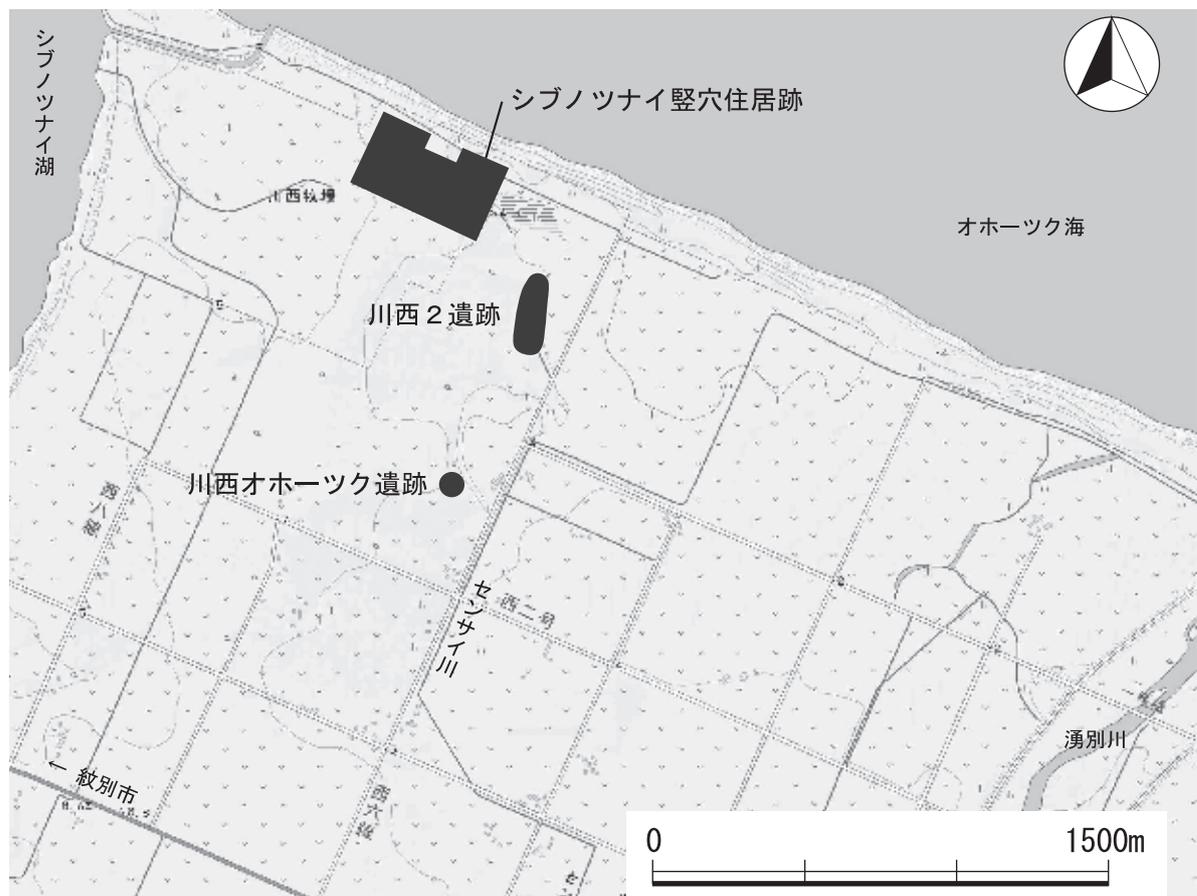
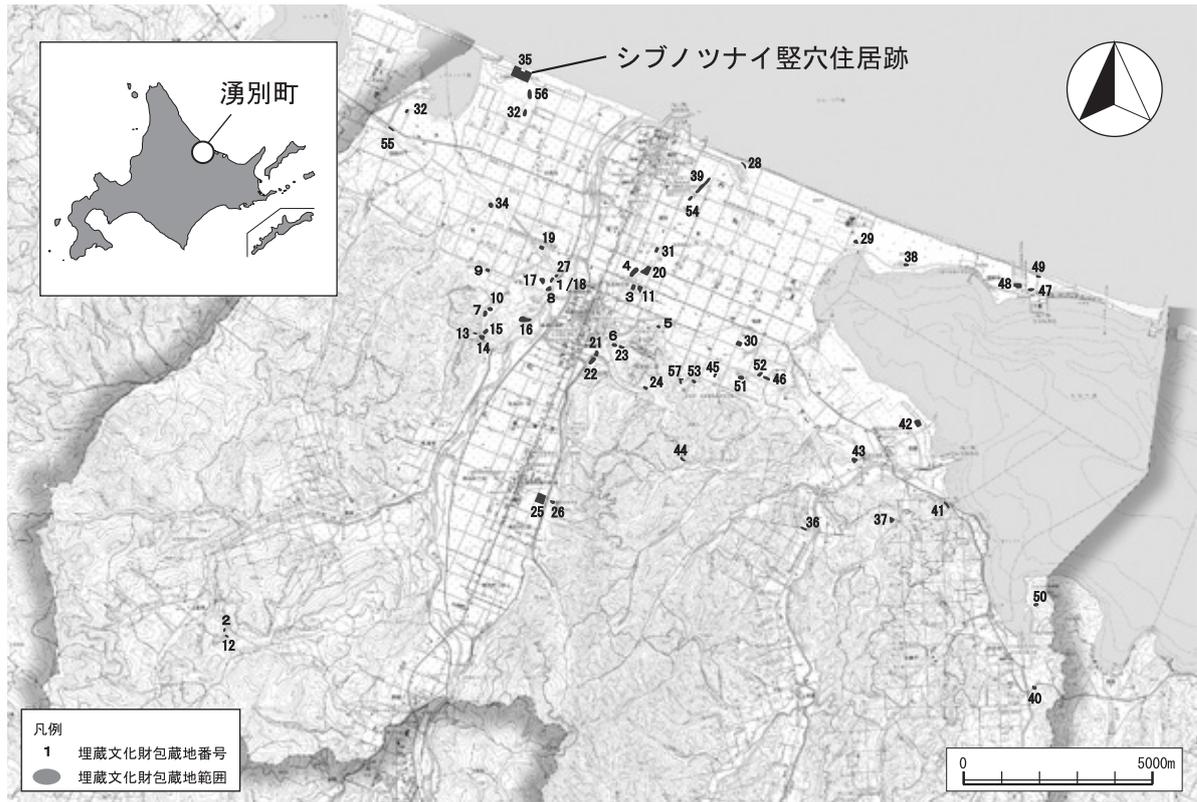
湧別町では令和3年度から湧別町シブノツナイ竪穴住居群調査検討委員会を設置している。委員会の会議は年に2回開催され、町が示す調査計画及び内容の妥当性について委員により検討が行なわれている。委員は次の3氏である。熊木俊朗氏（東京大学大学院教授）、國木田大氏（北海道大学大学院准教授）、岡孝雄氏（株式会社北海道技術コンサルタント地質調査部長）。検討委員会に関連して、今年度は近江俊秀氏（文化庁主任調査官）、宗像公司氏（道教委文化財調査係長）から現地指導を受けている（10月14日）。

2. 遺跡の位置と環境

(1) 湧別町の地理と遺跡

湧別町はオホーツク海に北面し、東はサロマ湖を囲む佐呂間町と北見市（旧常呂町）、西はシブノツナイ川を挟み紋別市、南は遠軽町と接している（図1上）。町の中心部を流れる湧別川は裏大雪山系の山並みの一つである天狗岳付近に水源を発し、北東に流れをとりながら山間を抜け遠軽に至る。そこで生田原川と合流し川幅を広げ、流れの方向を若干北に変え湧別の町を貫流しオホーツク海に注ぎこんでいる。オホーツク海に注ぎこむ河川としては常呂川に次いで大きく、市街地は湧別川が形成する扇状地を中心に発展してきた。

湧別川上流域である遠軽町白滝市街地の北方8km 地点には、国内最大規模の黒曜石原産地である赤石山がある。黒曜石は湧別川を河口まで流れ、それを素材とした石器は湧別町内で広く確認される。町内の遺跡は旧石器時代からアイヌ文化期まで幅広い年代のものが確認されており、その数は現在57か所となっている。遺跡の情報は道教委及び町教委が管理・公開する埋蔵文化財包蔵地調査カードに記載されているほか、詳細な位置や内容については道教委文化財・博物館課のホームページにある『北の遺跡案内』や湧別町のホームページでも確認できる。



(国土地理院電子地形図2万5千分の1「中湧別」を使用)

図1 北海道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」位置図

(2) シブノツナイ竪穴住居群の立地

シブノツナイ竪穴住居群は北海道紋別郡湧別町川西499-1のほか、湧別町が所有する牧草地や保安林の一部に所在し、東は湧別川の支流であるセンサイ川、西はシブノツナイ湖に挟まれた低平な舌状台地の先端部に位置している（図1下）。竪穴住居群が立地する舌状台地は標高4～5mほどで、台地の東西に広がる低地にはセンサイ川等によって形成されたと考えられる河跡沼や湿地帯が広がっている。

竪穴住居群の北側には海岸線に沿って砂丘列が形成され、周囲にはハマナス、ハマニク、ハマエンドウ、シロヨモギの群生が見られる。南西部から南東部にかけてはミズナラ、カシワを主体とする保安林が広がり、北西部及び北東部の低地ではヨシヤスゲ類が茂り泥炭が形成されている。シブノツナイ竪穴住居群やその西のシブノツナイ湖の名称に見られる「シブノツナイ」はアイヌ語を語源としており、「ウグイのいる川」を意味している。

道史跡となっている土地は湧別町農業協同組合により公営川西牧野の一部として利用されているため、竪穴住居群の南西側には受精施設などの牧野関連施設がある。毎年5月～10月はひと月に数日間、約150頭の乳牛が竪穴住居群に放牧されている。

(3) シブノツナイ竪穴住居群の概要

遺跡の特徴は、竪穴住居跡が窪みの状態で残り、密集した状態で地表面から確認できることである。窪みは様々な平面形状や大きさのものがあり、総数は530基を数える。平面形状毎に数を見ると、多いものから方形が326基、円形が176基、多角形が20基、柄鏡形が8基である（図2）。方形が約6割を占めていることや過去の発掘調査成果から、主に擦文文化期に形成された竪穴住居群だと考えられている。墓域や貝塚は確認されていない。

3. 調査の方法と結果

(1) 調査区の設定

調査に必要な基準点と測量基準杭は、平成27～29年度の道埋文の調査、平成30～令和3年度の町教委の調査で設定したものを継続して使用した。測量調査杭の名称は「南北ラインー東西ライン」で表している。今年の調査のため、新たに1本の杭（42-27）を設置した。

竪穴住居跡は、186号竪穴、433号竪穴及び434号竪穴を発掘調査の対象とした（図2・3）。過去の測量調査により確認されていた平面形状はそれぞれ張出付方形、円形、多角形である。調査区はいずれの竪穴も窪みの中心から東壁に向かって0.5m幅で設定し、カマドが存在していた場合に確認できるようにした。また、隣接する竪穴をまたぐようにも調査区を設定した。各竪穴の調査区の名称は竪穴中心からみた方位を頭につけ「東トレンチ」のように呼称する。

古環境調査は、竪穴住居群東側の低地を対象とした。土壌採取地選定のための予備調査として検土杖調査を17地点で行い、その内2地点でバックホウを用いて掘削を行った。バックホウによる調査地点は「古環境1」のように呼称する。

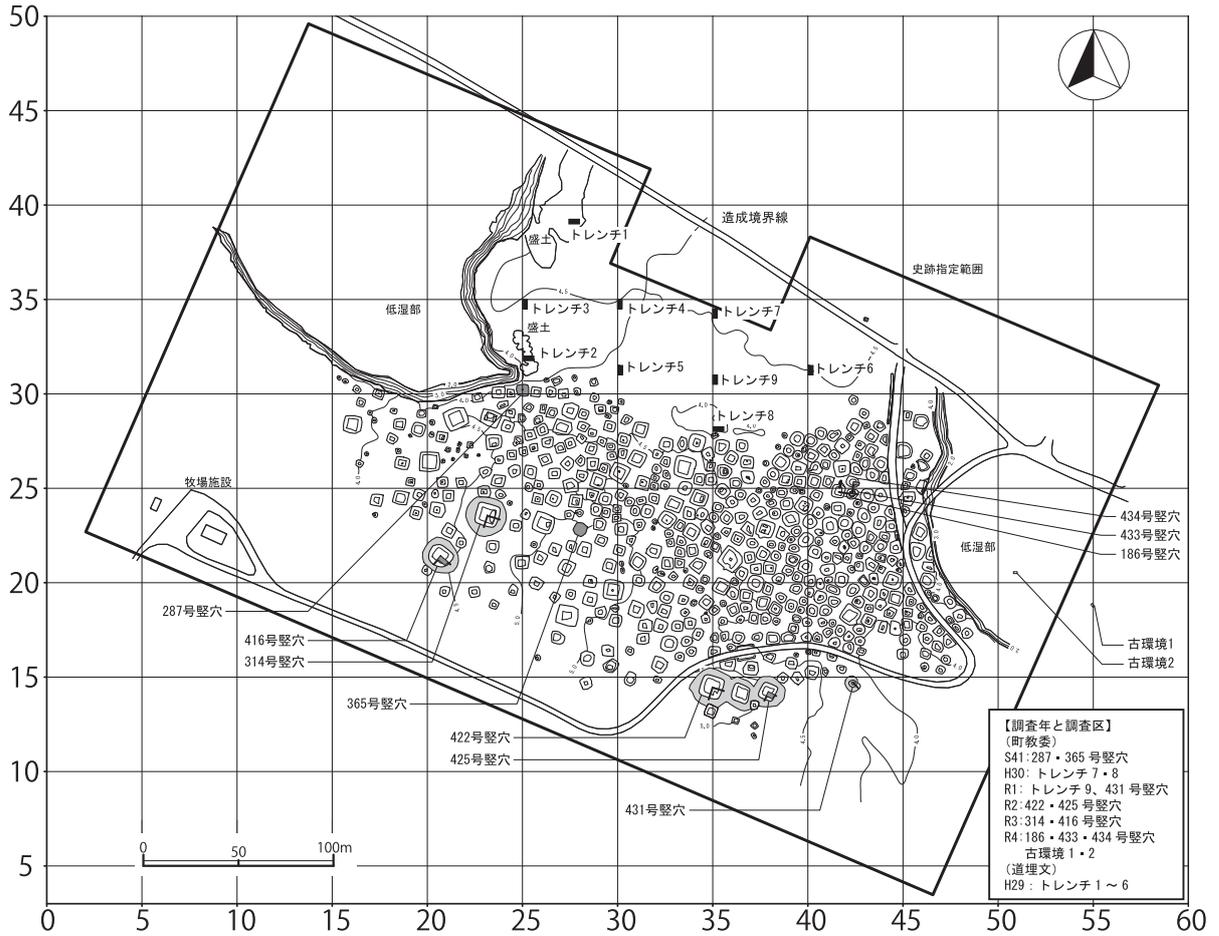


図2 竪穴住居跡分布及び調査区位置図 (1:4000)

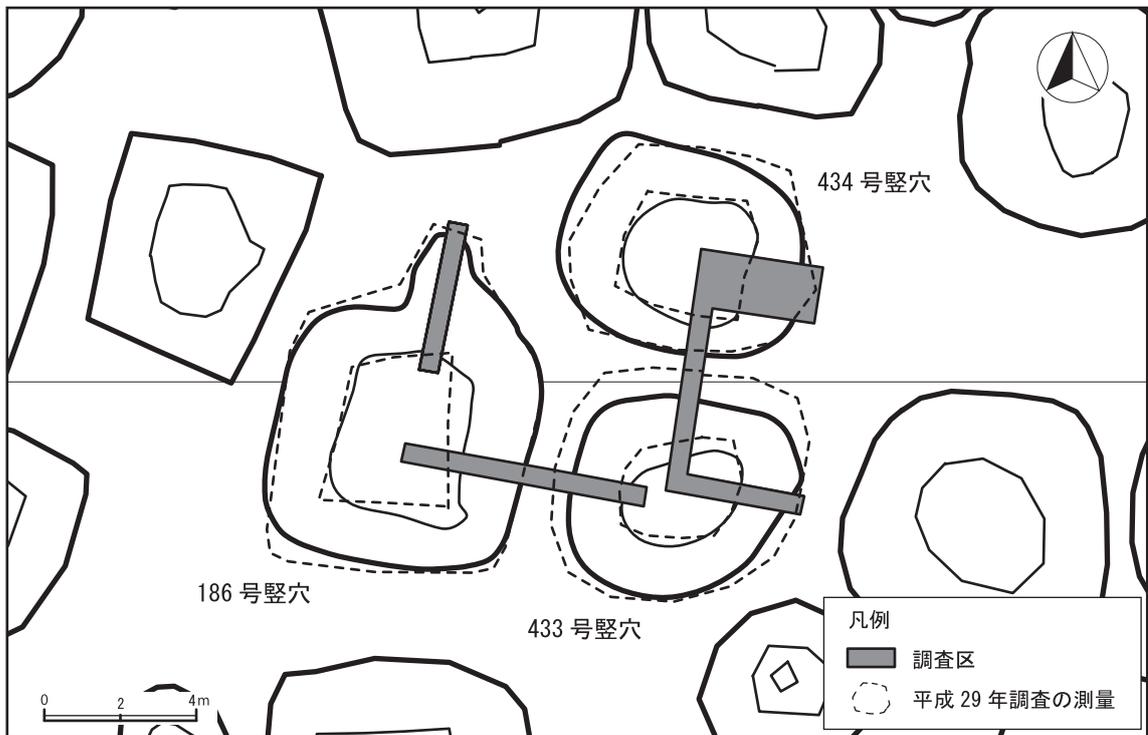
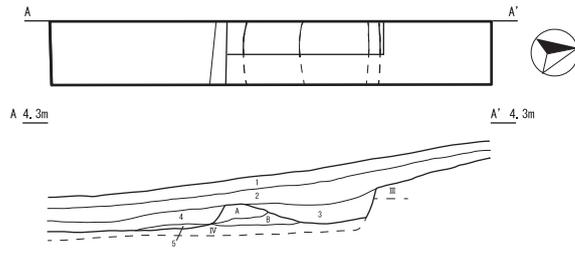
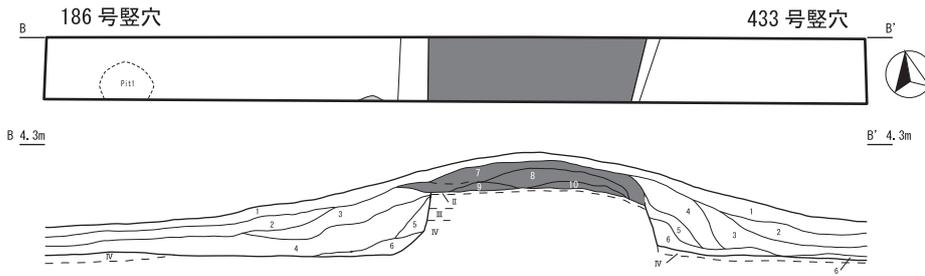


図3 186号・433号・434号竪穴周辺平面図 (1:200)

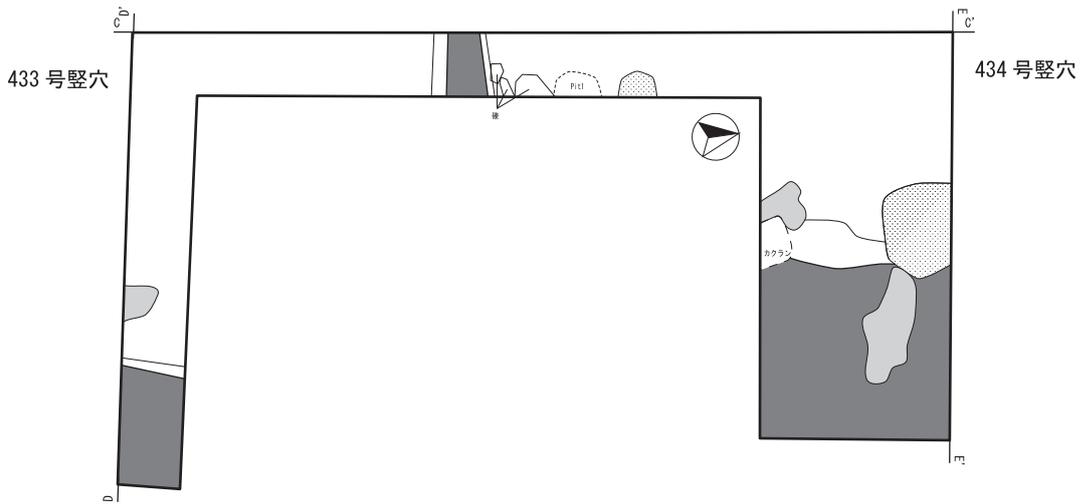
186号竪穴北トレンチ平面図・西壁土層断面図



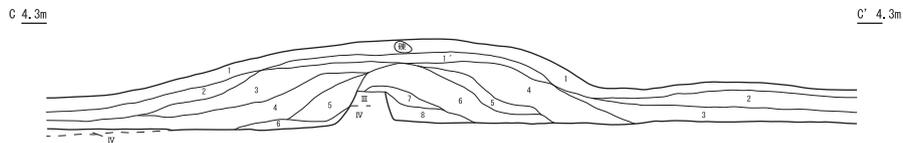
186号竪穴東トレンチ・433号竪穴西トレンチ平面図・北壁土層断面図



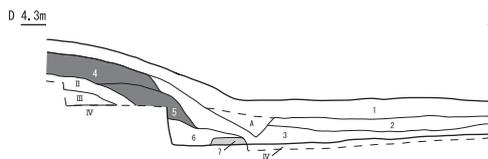
433号・434号竪穴平面図



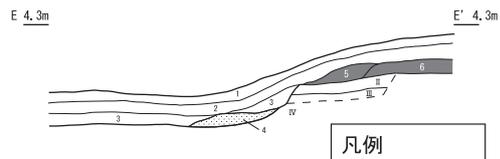
433号竪穴北トレンチ・434号竪穴南トレンチ西壁土層断面図



433号竪穴東トレンチ南壁土層断面図



434号竪穴東トレンチ北壁土層断面図



0 1:60 2m

凡例	
	周堤
	粘土
	焼土

図4 186号・433号・434号竪穴平面図・土層断面図（1:60）

表1 各竪穴住居跡の土層

186号竪穴 北トレンチ西壁(A-A')			186号竪穴 東トレンチ北壁(B-B')		
層位	色調・土性	その他の特徴	層位	色調・土性	その他の特徴
1	暗褐色土	表土。植物根を多く含む。	1	暗褐色土	表土。植物根を多く含む。
2	黒色土	基本層序Ⅱ層と同質。	2	黒色土	黄色粒0.1~0.5mm微量
3	黒褐色土	黄色粒0.1~0.5mm少量含む。	3	黒褐色土	黄色粒0.1~0.5mm少量
4	黒褐色土	黄色粒0.1~0.5mm中量含む。	4	暗褐色土	炭化物微量含む。
5	黒褐色土	黄色粒0.1~0.5mm少量含む。	5	暗褐色土	白色テフラ微量含む。炭化物微量含む。
A	暗褐色土		6	黒褐色土	炭化物少量含む。
B	褐色土	黒色粒0.1~0.5mm微量含む。			

433号竪穴 西トレンチ北壁(B-B')			433号竪穴 北トレンチ西壁(C-C')		
層位	色調・土性	その他の特徴	層位	色調・土性	その他の特徴
1	暗褐色土	表土。植物根を多く含む。	1	暗褐色土	表土。植物根を多く含む。
2	黒色土	黄色粒0.1~0.3mm微量含む。	2	黒色土	
3	黒褐色土	黄色粒0.1~0.5mm少量含む。	3	暗褐色土	黄色粒0.1~0.5mm微量含む。
4	暗褐色土	黄色粒0.1~0.5mm少量含む。	4	黒褐色土	黄色粒0.1~0.5mm中量含む。
5	暗褐色土	黄色粒0.1~0.5mm少量含む。	5	褐色土	黄色粒0.1~1.0mm多量含む。
6	褐色土	黄色塊多量含む。	6	黒褐色土	黄色粒0.1~0.5mm少量含む。
7	黒褐色土	黄色粒0.1~0.3mm少量含む。堀上げ土。			
8	にぶい黄褐色土	黄色塊多量含む。堀上げ土。			
9	黒色土	黄色粒0.1~0.5mm微量含む。堀上げ土。			
10	褐色土	黄色粒0.1~0.5mm微量含む。堀上げ土。			

434号竪穴 南トレンチ西壁(C-C')			433号竪穴 東トレンチ南壁(D-D')		
層位	色調・土性	その他の特徴	層位	色調・土性	その他の特徴
1	暗褐色土	表土。植物根を多く含む。	1	暗褐色土	表土。植物根を多く含む。
2	黒色土		2	黒色土	黄色粒0.1~0.3mm微量含む。
3	暗褐色土		3	黒褐色土	黄色粒0.1~0.3mm微量含む。
4	暗褐色土	黄色粒0.1~0.5mm中量含む。433号の堀上土か。	4	暗褐色土	黄色粒0.1~0.5mm少量含む。
5	黒褐色土	白色テフラ微量含む。炭化物微量含む。	5	暗褐色土	黄色粒0.1~0.5mm少量含む。
6	暗褐色土	黄色粒0.1~0.5mm中量含む。	6	黒褐色土	
7	黒褐色土	白色テフラ微量含む。	7	にぶい黄褐色土	白色粘土主体。
			A	黒褐色土	カクラン。

434号竪穴 東トレンチ北壁(E-E')		
層位	色調・土性	その他の特徴
1	暗褐色土	表土。植物根を多く含む。
2	黒色土	
3	暗褐色土	黄色粒0.1~0.5mm少量含む。
4	赤褐色土	カマド燃焼部。炭化物含む。
5	暗褐色土	黄色粒0.1~0.3mm微量含む。崩れた堀上土。
6	褐色土	黄色塊中量含む。

(2) 基本層序

シブノツナイ竪穴住居群で確認されている基本層序は、以下のとおりである。

- I層 表土。植物の根が密に入り込んでいる。
- II層 黒色土。層厚10~20cmの腐植土層。遺物包含層。旧表土。テフラを含む。
- III層 黒褐色土。腐植土。やや粘性がある。
- IV層 暗オリーブ褐色。漸移層。
- V層 黄褐色粘土。しまりが非常に強い。
- VI層 にぶい黄橙色粘土。しまり、粘性が非常に強い。

(3) 発掘調査成果 (概要)

①竪穴住居跡

方法 掘削は、表土はスコップ、竪穴埋土は移植ごてを使用し土層の変化に注意しながら層位ごとに進めた。遺物は、床面出土及び出土位置が重要と判断したものは位置を計測し、その他は層位ごとに一括して取り上げた。埋戻しは後年の検証調査を考慮し、埋土を詰め土のうで行った。ただし、表土分については竪穴群の景観を考慮し、不織布を敷いた上から土を直接戻した。

調査区の測量と合わせ、改めて竪穴の平面形状を測量した。その結果、186号竪穴は平成29年の測量と大きな差はなかったが、433号竪穴は北壁の上端が80cm程度南側に寄ること、434号竪穴は不整形に近い多角形であることが確認できた。

【186号竪穴】(図3・4)

平面形状と規模 張出付方形、長辺6.4×短辺6.0m、深さ0.52m、面積38.4m²

土層 竪穴はIV層を掘り込んでおり、床面直上に暗褐色土、その上には黒色土が堆積する。北トレンチでは壁の外側で黒色土が堆積する掘り込みが確認できた。東トレンチでは壁際で壁等の崩落に由来すると考えられる三角堆積が確認でき、壁の外側では堀上土による周堤が確認できた。周堤の下には、白色テフラが混入する旧表土が確認できた。

付属遺構 東トレンチで粘土範囲を1か所、用途不明のPit 1か所を確認した。粘土範囲はカマド関連の可能性があるが、極めて僅かな範囲であったため断定できない。北トレンチの掘り込みは、用途の特定には至らなかった。埋土に竪穴の堀上土が確認できなかったことから、竪穴建築後または竪穴関連の遺構の可能性がある。カマドの痕跡は確認されなかった。

出土遺物 床面直上の遺物は東トレンチで集中して確認された。擦文の小型甕（図版2-5-1）は器高約13cmで、口縁部は2列の斜め方向の刻文を持ち、内側に屈曲する。胴部には5～6本を一単位とした鋸歯文と斜め方向の沈線が巡る。内面は黒色処理が施されている。高坏と考えられる口縁部も確認できた。続縄文土器は後北C2-D式の破片が埋土から若干出土した。土器片の周辺で炭化木材が確認できた。

時期 出土遺物から、擦文文化後晩期と考えられる。

【433号竪穴】（図3・4）

平面形状と規模 円形、長辺6.4×短辺6.1m、深さ0.45m、面積30.6㎡

土層 竪穴はIV層を掘り込んでおり、床面直上に暗褐色土、その上に黒色土が堆積する。西・北・東各トレンチの壁際で壁や周堤の崩落等に由来する三角堆積が確認でき、西・東壁の外側では堀上土による周堤が確認できた。周堤の下には、白色テフラが混入する旧表土が確認できた。

付属遺構 東トレンチで粘土範囲が確認できた。カマドの一部の可能性がある。炉や柱穴は確認できなかった。

出土遺物 床面直上の遺物は北・西トレンチに集中していた。土器は主に擦文土器片で、甕は口縁部、胴部及び底部の各部位が出土した。甕の口縁部は斜め方向の刻文と3段の隆起帯を有するものがある。胴部は横走沈線を持たず鋸歯文や斜めの沈線により構成される文様、刷毛調整が施されるものが主体である（図版2-5-2）。坏は口縁部に屈曲部を持ち外反して立ち上がるものが確認できた。西トレンチの出土状況をみると、竪穴内部に近い堀上土の上部でまとまって出土するものがあり、竪穴外屋内空間の存在が窺える。東トレンチでは竪穴外の旧表土層下部で貼付文のあるオホーツク式土器片が1点出土した。続縄文後半のものと考えられる土器片は埋土から若干出土した。東トレンチでは僅かに炭化木材が出土した。その他、全体的にカマド構築材と考えられる焼成粘土塊が多く確認された。

時期 出土遺物から、擦文文化後晩期と考えられる。

【434号竪穴】（図3・4）

平面形状と規模 多角形→不整形、長辺6.6×短辺5.3m、深さ0.32m、面積28.4㎡

土層 竪穴はIV層を掘り込んでおり、床面直上に暗褐色土、その上に黒色土が堆積する。東壁の外側では堀上土による周堤が確認できた。周堤の下には、白色テフラが混入する旧表土が確認できた。

付属遺構 東トレンチで粘土範囲が確認できた。焼土範囲を伴うためカマドと考えられる。ただし、確認できた場所が壁の外側であること、袖部や天井部を確認できていないことから、住居廃絶時に破壊された可能性が高い。拡張区の南側に部分的に確認できた粘土範囲

はカマドの破壊に関連するものと考えられる。南トレンチでは、焼土範囲が1か所、Pitが1か所確認できた。壁付近では大型の礫が3点まとまって確認できたが、用途は不明である。

出土遺物 東トレンチ拡張区の粘土範囲周辺でまとまって擦文土器片が出土した。甕は胴部破片が多く、5本程度を1単位とする斜めの沈線により文様が構成されているものが主体である。口縁部は、刻みを持つ2～3段の隆起帯を有するものが多いが、刻みを持たないものも確認された。高坏は矢羽状の刻文や綾杉文をもつ口縁部や胴部破片が若干確認された（図版2-5-3）。続縄文土器では後北C2-D式土器の破片が埋土から若干出土した。南トレンチでは、礫は長さ10cm弱、幅4cm程度の楕円形のものが5点程まとまって出土した。その他、全体的にカマド構築材と考えられる焼成粘土塊が多く確認された。

時期 出土遺物から、擦文文化後晩期と考えられる。

②古環境調査

竪穴住居群形成当時の古環境復元を行うため、周辺に広がる低地の土壌堆積状況の確認と試料の採取が必要である。今年度は、竪穴住居群東部の低地が竪穴住居群形成当時に水域だったか否かを確認するため、珪藻分析のための土壌採取を行った。採取地選定のため17地点で検土壌調査を行い、そのうち2地点（古環境1・2と呼ぶ）で土壌を採取した。土層断面観察と土壌採取のための掘削にはバックホウを用いた。

【古環境1】

標高は1.285mである。土壌堆積状況は、0～約40cmは泥炭～ピート質泥層、約40～85cmは泥層、約85cm以下は極細～細粒砂層である。各層位について試料を採取した。約160～250cmは水が湧く中での掘削だったため詳細な層位観察は困難であったが、バックホウですくい上げられた土砂（砂礫～礫粗粒砂層）から新鮮断面を有する樹幹を採取した。5試料について珪藻分析を行った結果、塩分指数は1.07～1.14の範囲内であった。

【古環境2】

標高は2.253mである。土壌堆積状況は、0～約93cmは客土（最上部約10cmは新期泥炭層）、約93～151cmは泥層、約151～190cmは砂層である。客土が約1.0m弱あること、その下位には自然堆積層が残されていることが確認できた。各層位について試料を採取した。2試料について珪藻分析を行った結果、塩分指数は1.08～1.20の範囲内であった。

4. 普及活動

例年、地域の教育関係者へ発掘調査の実施を周知し、希望者の現地見学を受け入れている。今年度は次の4件。①7月15日、芭露学園8年生授業。②7月21日、湧別高校2年生授業。③8月2日、町新赴任教職員研修会。④8月3日、新篠津村姉妹都市交流事業。

11月19日には町ふるさと館 JRY で遺跡調査報告会を開催し、調査成果を紹介した。

5. 成果と課題

(1) 竪穴住居跡の時期特定

平面形状が円形の433号竪穴、多角形の434号竪穴の2基は、出土遺物からいずれも擦文

文化期のものだと確認できた。調査区は竪穴住居跡の一部であるため断言はできないが、壁の検出状況からどちらの竪穴も本来は方形だった可能性が高い。竪穴廃棄後、隣接する竪穴の堀上土の影響を受けたことなどにより、埋没過程において形状が変形したと考えられる。張出付方形の186号竪穴も出土遺物から擦文文化期のものであることが確認できた。

各竪穴住居跡で炭化木材が採取できたため、放射性炭素年代測定を実施中である。ここでは、昨年度実施した年代測定の結果を表2に示す。7点の試料のうち6点が10世紀末から12世紀中頃の年代に収まったため、4基の竪穴はいずれも擦文文化後晩期のものの可能性が高い。古い年代が得られた416号竪穴の試料は、樹齢のある木材の中心部近くのものだったと考えられる。その他の自然科学分析として、出土土器の付着炭化物について炭素・窒素安定同位体比測定を実施中である。結果は、今年度実施中の年代測定結果と併せて、次年度の概要報告書または総括報告書で報告予定である。

表2 炭化木材試料の放射性炭素年代値

採取竪穴	採取層位等	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
314号竪穴	床面直上	-24.1 \pm 0.4	945 \pm 19	945 \pm 20	1042-1051 cal AD (8.0%) 1080-1108 cal AD (25.6%) 1116-1153 cal AD (34.7%)	
	床面直上	-26.54 \pm 0.19	971 \pm 18	970 \pm 20	1029-1047 cal AD (23.20%) 1083-1095 cal AD (13.05%) 1103-1125 cal AD (26.35%) 1141-1147 cal AD (5.67%)	1025-1050 cal AD (27.48%) 1080-1154 cal AD (67.97%)
416号竪穴	床面直上	-26.34 \pm 0.19	1193 \pm 19	1195 \pm 20	775-776 cal AD (1.14%) 781-788 cal AD (8.49%) 826-881 cal AD (58.64%)	774-792 cal AD (15.49%) 796-887 cal AD (79.96%)
	カマド燃焼部	-24.1 \pm 0.5	991 \pm 20	990 \pm 20	1021-1045 cal AD (46.0%) 1085-1093 cal AD (6.4%) 1104-1121 cal AD (15.8%)	
422号竪穴	粘土層下部	-25.09 \pm 0.18	944 \pm 18	945 \pm 20	1041-1051 cal AD (8.77%) 1079-1089 cal AD (8.60%) 1090-1107 cal AD (14.86%) 1115-1154 cal AD (36.04%)	1035-1054 cal AD (14.32%) 1058-1157 cal AD (81.13%)
	床面直上	-23.8 \pm 0.3	914 \pm 19	915 \pm 20	1047-1084 cal AD (42.2%) 1128-1140 cal AD (7.1%) 1149-1170 cal AD (19.0%)	
425号竪穴	カマド燃焼部	-27.09 \pm 0.18	991 \pm 18	990 \pm 20	998-999 cal AD (0.90%) 1022-1043 cal AD (49.98%) 1087-1092 cal AD (5.06%) 1106-1117 cal AD (12.33%)	995-1004 cal AD (4.83%) 1019-1048 cal AD (53.28%) 1082-1130 cal AD (31.83%) 1138-1151 cal AD (5.50%)

(2) 古環境調査

古環境1では5点、古環境2では2点について珪藻分析を行った。結果、ともに淡水生種や汽～淡水生種が大半を占めていたため、竪穴住居群東側の低地は海水の影響はないと考えられる。土壌の堆積状態を見ると、泥層が縞状に認められることから湖沼、極細～細粒砂層が認められることから河道の状態があったことが考えられる。

古環境1で採取した樹幹は放射性炭素年代測定を依頼中である。年代測定の結果は、珪藻分析の詳細データとあわせて総括報告書で報告予定である。

(3) 今後の調査

次年度も今年度と同規模の発掘調査を行い、遺跡の年代や範囲、古環境を確認する予定である。具体的な調査内容は令和4年度第2回調査検討委員会の結果を踏まえて決定する。

図版 1



1 調査区遠景（東から）



2 調査区全景（南から）



3 186号竪穴 北トレンチ（南東から）



4 186号竪穴 東トレンチ（南西から）



5 186-433号竪穴間 周堤部（南から）



6 433号竪穴 西トレンチ（南東から）



7 433号竪穴 東トレンチ（北西から）



8 433号竪穴 北トレンチ（南から）

図版 2



1 434号竪穴 東・南トレンチ (北西から)



2 434号竪穴 東トレンチ (南から)



3 433-434号竪穴間 (東から)



4 古環境調査



1



2



3

5 出土遺物 (1 : 186号竪穴、2 : 433号竪穴、3 : 434号竪穴)

引用・参考文献

報告書等

- 網走市立郷土博物館 1990『網走市立郷土博物館収蔵考古資料目録第4集「オホーツク沿岸の遺跡」』
北海道立埋蔵文化財センター 2015『重要遺跡確認調査報告書第10集』
2016『重要遺跡確認調査報告書第11集』
2017『重要遺跡確認調査報告書第12集』
2018『重要遺跡確認調査報告書第13集』
2019『重要遺跡確認調査報告書第14集』
2020『重要遺跡確認調査報告書第15集』
2021『重要遺跡確認調査報告書第16集』
- 湧別町教育委員会 2019『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡 発掘調査報告1』
2020『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡 発掘調査概要報告書(2019年度)』
2021『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡 発掘調査概要報告書(2020年度)』
2022『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡 発掘調査概要報告書(2021年度)』
- 青柳文吉編 1995『北方民族博物館調査報告 湧別町川西遺跡』北海道立北方民族博物館
大場利夫 1965「湧別町古代史」『湧別町史』 湧別町
1966『湧別町シブノツナイ遺跡調査概要』 湧別町教育委員会
熊木俊朗 2016『擦文文化期における環オホーツク海地域の交流と社会変動 - 大島2遺跡の研究(1) -』
東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設
2021『アイヌ文化形成史上の画期における文化接触：擦文文化とオホーツク文化 - 大島2遺跡の研究(2) -』東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設
米村喜男衛 1961『川西遺跡調査報告』網走郷土博物館シリーズ 網走市立郷土博物館
米村喜男衛 1981「北海道紋別郡湧別町川西遺跡」『北方郷土・民族誌』3 北海道出版企画センター
米村哲英 1963『北海道紋別郡湧別町字川西シブノツナイ遺跡調査概報』湧別町

論文等

- 大沼忠春編 2004『考古資料大観 第11巻 続縄文・オホーツク・擦文文化』小学館
熊木俊朗 2018『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』北海道出版企画センター
小疇尚・野上道男・小野有吾・平川一臣編 2003『日本の地形2 北海道』東京大学出版会
後藤壽一 1932「北見の遺跡をたづねて」『蝦夷往來』第7号 尚古堂
榊田朋宏 2016『擦文土器の研究』北海道出版企画センター
塚本浩司 2002「擦文土器の編年と地域差について」『東京大学考古学研究室研究紀要』17 東京大学考古学研究室
戸苅賢二・土屋篁 2000『北海道の石』北海道大学出版会
長尾捨一 1962『5万分の1地質図幅説明書「中湧別」』北海道開発庁
中田裕香 2016「大場利夫と竪穴群」『北海道考古学』第52輯 北海道考古学会
藤本強 1988『もう二つの日本文化』東京大学出版会
本間源治 1928「湧別沿岸紀行」『郷土研究』創刊号 北見郷土研究会
町田洋・新井房夫編 2003『新編 火山灰アトラス - 日本列島とその周辺』東京大学出版会
横山英介 1990『擦文文化』ニュー・サイエンス社

報告書抄録

ふりがな	ほっかいどうしていしせき しぶのつないたてあなじゅうきよあと はくつちようさがいようほうこくしよ (2022ねんど)							
書名	北海道指定史跡 シブノツナイ竪穴住居跡 発掘調査概要報告書 (2022年度)							
副書名	史跡内容確認のための調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	林 勇介							
編集機関	湧別町教育委員会社会教育課ふるさと館 JRY・郷土館							
所在地	〒099-6325 北海道紋別郡湧別町北兵村一区 588 番地 TEL01586-2-3000							
発行年月日	西暦 2023 年 3 月 20 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		日本測地系		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
シブノツナイ なてあなじゅうきよぐん 竪穴住居群 どうしていしせき (道指定史跡) シブノツナイ なてあなじゅうきよあと 竪穴住居跡	ほっかいどうもんべつぐん 北海道紋別郡 ゆうべつちようかわにし 湧別町川西 499-1・2, 502-1・ 2, 503, 714, 717 ～ 720, 722-1～ 3, 930, 1056, 1059- 1	15598	I-21-35	44° 14' 40.14"	143° 34' 32.56"	2022. 7. 14 ～ 8. 20	22.1 m ²	史跡保護のための詳細分布調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
湧別町 シブノツナイ 竪穴住居群 (北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡)	集落跡	統縄文文化期 擦文文化期	窪みで残る竪穴住居跡が530基。 竪穴は4～7m規模の方形を呈するものが主体であるが、10m前後の大型のものが15基見られる。		擦文土器	竪穴住居跡3基でトレンチ調査。		

北海道指定史跡
シブノツナイ竪穴住居跡
発掘調査概要報告書（2022年度）

史跡内容確認のための調査

発行年月日 2023年3月20日

編集・発行 湧別町教育委員会

〒099-6325 北海道紋別郡湧別町北兵村一区588

湧別町ふるさと館 JRY・郷土館

電話 (01586)2-3000

印刷 北湧印刷

北海道紋別郡湧別町緑町99番地